

ITUAJより

編集後記

以前、小さなお祭りイベントに参加したことがありました。飲食系の店が多かった中、私たちの店は、竹ひごとメタルテープ等で作ったおもちゃを販売しました。竹トンボを飛ばすような動作で、竹ひごを回転させると、その周りにテープが球状になり、シャボン玉のようにキラキラ・ゆらゆらと揺れるものです。完成品のほか、自分で作ることができるように材料と作り方をセットにしたキットも販売しました。午前中の反応はあまり芳しくなかったのですが、時間が経つと、求めてこられる方が増えました。購入された方が遊んでいるのを見て探してきてくださったと聞き、動く看板のような効果を感じたものです。

本号の特集は、スペイン・バルセロナで開催された世界最大級のモバイル関連展示会であるMWCのレポートです。日本から出展された各社からは、技術内容のほか、ブースでの来場者対応の工夫についても紹介されています。

どうぞ精読ください。

ITUジャーナル読者アンケート

アンケートはこちら https://www.ituaj.jp/?page_id=793

編 集 委 員

委員長	亀山 渉	早稲田大学
委員	鈴木 勝裕	総務省 国際戦略局
〃	西野 寿律	総務省 国際戦略局
〃	青野 海豊	総務省 総合通信基盤局
〃	山崎 浩史	国立研究開発法人情報通信研究機構
〃	井上 朋子	NTT株式会社
〃	中山 智美	KDDI株式会社
〃	大山 真澄	ソフトバンク株式会社
〃	薮 拓也	日本放送協会
〃	酒見 美一	通信電線線材協会
〃	長谷川一知	富士通株式会社
〃	森 正仁	ソニーグループ株式会社
〃	神保 光子	日本電気株式会社
〃	中平 佳裕	沖電気工業株式会社
〃	阿藤 友紀	一般社団法人情報通信技術委員会
〃	三木 啓嗣	一般社団法人電波産業会
〃	山崎 信	一般社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター
顧問	相田 仁	東京大学
〃	新 博行	株式会社NTTドコモ
〃	田中 良明	早稲田大学

編集顧問より

訳書出版におけるIT利活用
～訳書は絶滅危惧種？～

東京大学 名誉教授

あいだ ひとし
相田 仁

大学院を出て就職した頃から、主にネットワークやOSに関する英文の本を何人かで分担して和訳して出版する話を時々いただき、数えてみると近日中に出版予定のもので11冊目になる。

初めの頃は、原稿用紙に手書き、校正は紙に赤ペンで記入だった。ある訳者が郵送した原稿が行方不明になり、翻訳を一からやり直すというアクシデントもあった。その後まず原稿が電子ファイルになり、次いで校正もPDFでやり取りするようになって、訳者の作業効率はかなり向上した。

一方、多人数で分担して訳していると、訳者による訳語の不統一が生じやすいが、長らく和訳原稿しか電子化されていなかったため、訳語の統一は監訳者と出版社の編集者の技量によるところが大きかった。

2023年に出版された本の中から、原著のPDFをWordに変換し、左側に原著の英文、右側に和訳の形で原稿を作成することで、原著の同じ用語がどのように訳されているか検索をかけることが容易になり、訳語の統一がだいぶ容易になった。

さらに、近日中に出版予定の本では、校正刷のPDFをWordに変換して原稿と比較することで、制作中に紛れ込んだ誤植等をかなり多数見つけることができた。

上記11冊の中には、学生さんに輪講形式で下訳を作ってもらったものがあるが、最近ではプロの翻訳家でもAI技術を使って下訳を作成する場合が少なくないと聞く。実際、最近のAI技術の進歩はめざましく、ほとんど違和感のない文章を作ってくれるばかりでなく、生成AIであれば要約などもしてくれるので、近い将来、訳書の存在価値が怪しくなりそうである。

その点、近日中に出版予定の本では、複数の訳者の間でクロスレビューと称して訳文のチェックを行い、それもふまえて、原著の誤りなどに対して多くの訳注を付けるなどした。当該分野の専門家が翻訳していることのメリットと言えよう。

しかし、生成AIが的確な訳注を付けられるようになることは想像に難くない。やはり訳書は絶滅危惧種なのだろうか。

ITUジャーナル

Vol.55 No.10 2025年10月1日発行／毎月1回1日発行

発行人 吉田 博史

一般財団法人日本ITU協会

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-17-11

BN御苑ビル5階

TEL.03-5357-7610(代) FAX.03-3356-8170

編集人 宮下英一、石田直子、加藤慶子

編集協力 岩城印刷株式会社

©著作権所有 一般財団法人日本ITU協会